

『字彙』の明刊本鹿角山房刻本とその和刻本を 比較してみる『異体字弁』の成立

——同じ字の同じ部品の書き方の異同に注目して——

劉 玲・沈 涵

キーワード：『異体字弁』、『字彙』、明刊本鹿角山房刻本、和刻本、部品

要 旨

江戸時代において、中国明代の字書『字彙』（1615年刊）の影響下で成立した字書が多い。中には、異体字研究史上で早期の専著とされる『異体字弁』（1692年刊）の編纂の際に『字彙』を参照されたと指摘されたが、参照となったのは『字彙』の明刊本鹿角山房刻本なのか、その和刻本なのか未だに疑問である。本稿では、字形上の相違特に同じ字の同じ部品の書き方に注目して、この問題について考えてみた。

実際、『異体字弁』収録字（5002字）のうち明刊本鹿角山房刻本とそれを底本とした和刻本（三種）に共通して見られる字（2690字）について、字形上では、両者の間には相違を見ない字（2578字）がほとんどだが、明らかに相違が見られる字は112字も見つけた。その112字中に最も多く用いられる「木」という部品を含む字（「床」や「様」など73字）とその次に多く用いられる「牛」という部品を含む字（「折」や「菘」など7字）の合わせて80字を拾いだし、縦画（「木」の二画目と「牛」の四画目）の書き方において如何なる異同、つまり「|」のようにはねて書かれるか、それとも「|」のように書かれるかに注目して検討してみたところ、次のようなことがわかった。すなわち、「|」と書かれる場合と「|」と書かれる場合における字例を見ると、『異体字弁』ではそれぞれ65字と15字で、和刻本ではそれぞれ74字と6字で、明刊本鹿角山房刻本ではそれぞれ0字と80字となっている。明らかに、『異体字弁』においては、和刻本と同様に「|」と書かれる傾向を示しており、明刊本鹿角山房刻本に示している「|」と書かれる傾

向とは異なっている。したがって、この二つの部件の縦画の書き方を見る限り、現段階では、『異体字弁』は明刊本鹿角山房刻本より和刻本を参照して成立した可能性が大きいのではないかと考える。

なお、本稿は『異体字弁』の成立について検討する際の一つの手がかりを示しただけでなく、このようにその成立事情を究明すること自体は、江戸時代ないし字書史における中日字書の交流に対して意味のある議論であると考ええる。

はじめに

日本の辞書の成立は古代中国の辞書を模倣したことに始まるとされる¹。平安初期に成立した日本最古の字書といわれる『篆隸萬象名義』は中国六朝の『玉篇』に依拠したものであり、その後成立した『類聚名義抄』（観智院本）は唐の『干禄字書』や遼の『龍龕手鑑』などの影響を受けたと指摘された²ように、中日辞書の交流は平安時代に遡る。

時代が下って、江戸時代に至っては、明代の梅膺祚編纂の『字彙』（万暦四十三（1615）年）、清代の呉任臣編纂の『字彙補』（康熙五（1666）年）と張自烈編纂の『正字通』（康熙十（1671）年）³などの字書が将来され、時にはその和刻本まで作られるようになり、江戸時代の各種の字書の成立に影響していた。この時期において、特に「異体字」の研究が盛んに行われ、その専著が次々と刊行されるようになった⁴。そのうち、本稿の対象とする中根元圭編纂の『異体字弁』（1692年刊、1.1で詳述）は、

¹ 杉本つとむ（1998）は「日本の辞書は中国辞書（字書）を父とも母ともして生みおとされた娘である。」（4 ペ）と指摘している。なお、「中国辞書（字書）」とする書き方からして、当著では「辞書」という用語で「字書」と「辞書」を一括しているようである。

² 杉本つとむ（1998）において「（『篆隸萬象名義』は）中国字書『玉篇』を抄録したものとわれ」（30 ペ）とあり、また、「（『類聚名義抄』（観智院本）は）中国顔元孫『干禄字書』、増行均『龍龕手鑑』からの影響が考える。」（15 ペ）とあるように指摘している。（ ）中は筆者による。以下同様。

³ 『字彙』には 33179 字を、『字彙補』には 12317 字を、『正字通』には 33790 字を収録。

⁴ 本稿の対象とする『異体字弁』のほか、元禄三（1690）年刊『異字編』（雲石堂寂本編纂）、宝暦三（1753）年刊『倭楷正訛』（太宰春台編纂）、宝暦十（1760）年刊『同文通行』（新井白石編纂）などが挙げられる。なお、杉本（1978b）によれば、「異体字」という用語は『異体字弁』において初めて用い出されたのである。ただ、『異体字弁』においては、「異体字」について具体的に定義したり説明するところは見当たらない。当字書「導言」において「字逢異体而欲知其正体者」とあるように、字の「正体」以外は「異体」という理解のようである。

笹原 (2018) において「雲石堂寂本『異字編』に次ぐ、『異体字弁』は⁵異体字研究史のうえで早期の専著としての成果」(34 ペ) とある指摘のように、割合に成立時期が早いということ、また、杉本 (1998) において「『異体字弁』は異体字、約五千字が収録されて正体と対照されている。これに対して『倭楷正訛』はわずか二百八十餘字と、字数の上では比べ物にならない。また新井白石には『同文通考』の労作があり(中略)同書『同文通考』もやはり字数が少なく、異体字の研究もみられるが、字書の名を与えるのはふさわしくない。その点、やはり『異体字弁』は群を抜いたといってもよからう。」(468 ペ) とある指摘のように、当時のその他の字書(『倭楷正訛』や『同文通考』)に比べて収録字は群を抜いて多いということがわかる。この二点からして、『異体字弁』は異体字研究の資料ないし江戸時代の字書として重要視すべきものと言える。

筆者は、これまで『異体字弁』を対象に、江戸時代における異体字の在り様ないし字書の中日交流について研究に取り組んでいる⁶。ただ、『異体字弁』の成立に関しては、今なお不明な点が残る。つまり、杉本 (1978b) では「さて元圭は画引による漢字分類をほどこす上に、この『字彙』を参照したことは決定的となった。机上に『字彙』をおいて『異体字弁』編纂に使用したことはまちがいない。」⁷ (147 ペ) と早く指摘されたが、『異体字弁』が参照したのは、この『字彙』の中国刊本(1.2 で詳述)なのか、それとも和刻本(1.3 で詳述)なのかについては、問題視されておらず、未だに疑問である。

本稿では、同じ字の同じ部品の書き方の異同に注目して、『異体字弁』が参照したのはどれかについて検討する。このように考えたのは、筆者は、『異体字弁』に収録した5002字について『字彙』の明刊本鹿角山房刻本とその和刻本(三種)に一つずつ

⁵ 下線____は筆者による。以下同様。

⁶ 沈涵 (2020) では、次の三点から『異体字弁』がもつ資料的価値を述べ、江戸時代における重要視すべき資料であることを指摘した。一つ目に、一般に使われている『倭玉篇』と『節用集』の類と違って、見出し字の配列について画数順と起筆によるというそれまでにない新しい方法をとっており、その後の字書に大いに参照されるようになった。二つ目に、『異体字弁』においてはじめて用いる体裁(本稿 1.1 に述べる「好異門」における正字を見出し字としてその異体字を引く)及び『異体字弁』に収録された字は、その後に成立した『倭楷正訛』(1753 年刊)・『正楷録』(1791 年刊)・『省文篆考』(1803 年刊行)などの字書に受け継がれている。三つ目に、画数順と起筆による配列方法をとること及び異体字の分類のしかたにおいて『字彙』から影響を受けており、中日字書の交流を議論する際には見逃せない。また、沈涵 (2021 年刊行予定) では、『異体字弁』収録字(5002 字)のうち 2690 字が『字彙』に共通していると確認し、また、個々の異体字の分類について『異体字弁』と『字彙』の間に異同があると確認できた。

⁷ 杉本 (1998 (482 ペ)) においては杉本 (1978b) を踏襲している。

確認してみたところ、両者に共通して見られるのは 2690 字あり、特に、そのうちに、字形上では両者の間には相違を見ない場合 (2578 字) がほとんどである一方で、ばらばらに散在してはいるが、明らかに相違が見られる字は 112 字も見つけたからである。

そこで、本稿では、具体的に次のように論を進める。まず、『異体字弁』・『字彙』の中国刊本・『字彙』の和刻本に関する主要な情報について述べる (1 節)。次に、『異体字弁』の成立と『字彙』の関わりについての先行研究とその問題点について述べる (2 節)。その上、先に述べた字形上において明刊本鹿角山房刻本と和刻本の間に明らかに相違が見られるといったようなもの (112 字) の中から、最も多く用いられる「木」という部件を含む字 (73 字) とその次に多く用いられる「牛」という部件⁸を含む字 (計 7 字) を拾いだし、その縦画 (つまり「木」の二画目と「牛」の四画目) の書き方に注目して、『異体字弁』における書き方を確認したうえ、明刊本鹿角山房刻本と和刻本とを見比べ、書き方の上の異同について調べる (3 節)。最後に、現段階で得られた結果と今後の課題について述べる。

1. 『異体字弁』・『字彙』の中国刊本・『字彙』の和刻本に関する主要な情報

この節では、『異体字弁』・『字彙』の中国刊本・『字彙』の和刻本に関して、それぞれ本稿の議論に関わる主要な情報について述べる。

1.1 『異体字弁』について

本稿で使用する『異体字弁』のテキストは、杉本つとむ編『異体字研究資料集成第一期第二巻 異体字弁』に収めるものであり、杉本つとむ氏「解説」を付す(杉本つとむ編〈1978a〉を参照)。以下、(1)～(6)の諸点から関係の情報についてまとめて述べる⁹。

(1) 編纂者と成立

当字書の題簽に「中根璋元圭輯」とあり、編纂者の名を記している。「元圭」は号で、「元珪」とも書く¹⁰。中根元圭 (1662～1733 年) は近世の和算暦法家であり、『新

⁸ 本稿で言う「部件」は、「木」が偏旁冠脚として使う場合とそうでない場合の両方を含む。例えば、後 3.1 に掲げる「奈」と「杯」は偏旁冠脚の場合で、また、「埜」と「夢」はそうでない場合である。「牛」という部件についても同様に両方の場合を含む。

⁹ なお、以下の諸点について、杉本 (1978a)「解説」(370 ペ～380 ペ) と笹原 (2018) においても述べられている。

¹⁰ 笹原 (2018) に「中根璋、号元圭・元珪」(39 ペ) とある。

においては「一 弌・壹・鬻・鬻」としており、見出し字「一」が正字であり、「一」からその四つの異体字である「弌」「壹」「鬻」「鬻」を見つけることができる。このように、字引きとしての使いやすさが配慮されていると考えられる。

付録(91オ～91ウ)には、「和俗字」(国字と国訓)を掲げ、89字を一覧している。

(4) 収録字の性格

当字書の「導言」において、「輯日用字。至其非常字、以俟後學而已。」¹³とあるように、本来、日常に使用する字を収める¹⁴。

(5) 収録字の配列方法

当字書は総画数の順により、1画から44画まで、字を配列している。また、同画数の場合に、起筆によって「起横」・「起直」・「起斜」の順に前後にする¹⁵。

(6) 編纂の目的

貝原益軒の「序」に「辨正俗、釐古今、分異同、昭得失」とあるように、個々の異体字について正字に比してその属性を把握し、類別して示すのが本来の目的である¹⁶。

1.2 『字彙』とその中国刊本及び日本における将来の状況について

以下、(1)～(3)の三点から『字彙』の中国刊本及び日本における将来の状況についてまとめる。

(1) 編纂者・成立年・体裁・内容

『字彙』は明・万曆四十三(1615)年に刊行され、編纂者は梅膺祚(万曆初年生まれ、没年未詳)である。その後、明代から清代にかけて数回にわたって増補し刊行されていた。原刊本は、中国台湾国家図書館蔵の江東梅氏原刻本(後掲表1のa)の一本し

¹³ 句読点は筆者による。以下同様。

¹⁴ 何が「日用字」なのかについて『異体字弁』には述べておらず、収録する際の基準は必ずしも明確しているようには見えない。筆者は、『異体字弁』に収録された字(5002字)について、読本・浮世草子・随筆・俳諧など当時におけるいわゆる大衆文学作品(『新日本古典籍総合データベース』に収めるものでおよそ百種)で調べてみたが、稀にしか使われていない印象である。この「日用字」として認めるのは何かについて、また、別稿で検討したい。

¹⁵ 「起横」・「起直」・「起斜」に言う「起」は、起筆つまり首画を指す。「起横」と「起直」はそれぞれ起筆が横画と縦画であることを意味する。起筆は横画と縦画以外の場合は、すべて「起斜」と言う。例えば、「麦・呈・乱」の三字は同じく7画だが、この順に配列されているのは、それぞれ起筆が横画(「起横」)・縦画(「起直」)・へつ(「起斜」)となっているからである。

¹⁶ 『異体字弁』では、異体字について、古字・俗字・通字・同字・本字・即字・省字・譌字・誤字・佛字・篆字・隸字・籀字の13類に分類している。例えば、前掲の図1に示すように、「𠂔」は「下」の古字であり、「𠂔」は「上」の古字である。

か現存しない（周〈2016〉による）。今回は未見のため、ここで、内閣文庫蔵（後掲表1のb）¹⁷の明刊本鹿角山房刻本により紹介する。なお、国立公文館デジタル所蔵資料による電子版を使用する。

全書は首巻、本文（子巻から亥巻まで十二支による十二巻）、末巻の合わせて十四巻からなる。表紙返しには「鐫宣城梅誕生先生重訂字彙 鹿角山房蔵版」の刊記が見え、首巻には梅鼎祚による序がある。収録字数は約 33179 字ほどで、部首別・画数によって配列している。字ごとに、その字音・字形・字義について説明している。

(2) 明刊本鹿角山房刻本を含む各種の中国刊本

先に触れたように、『字彙』成立後幾たび増補し刊行されていた。次頁の表1にまとめたように、刊行年次が記される刊本だけでも、a から i の 9 種ほどある¹⁸。中には、h の表紙に「増補文成字彙」とある以外に、他の 8 種はみな『字彙』とある。刊・印年次からわかるように、a の江東梅氏原刻本と本稿で扱う b の鹿角山房刻本の 2 種は明刊本で、その他 c から i の 7 種はみな清刊本である。（以上は高橋〈2008〉と周〈2016〉による）

表1 中国刊本の諸事情

	表紙に記す名称	版本	刊・印年次	所蔵その他
a	字彙	江東梅氏原刻本	明万曆四十三（1615）年	（中国台湾）国家図書館蔵
b	字彙	鹿角山房刻本	明万曆（1573～1620）中	内閣文庫蔵・北京大学蔵
c	字彙	真寂院本	清康熙四（1665）年	上海図書館蔵
d	字彙	西冷怡堂主人葉之明刻本	清康熙十（1671）年	未詳
e	字彙	雲栖寺刻本	清康熙十八（1679）年	（北京）国家図書館蔵
f	字彙	靈隱寺刻本	清康熙二十七（1688）年	「字典彙編」収録
g	字彙	宝綸堂刻本	清雍正十二（1734）年	「四庫全書」収録
h	増補文成字彙	京都文成堂刻本	清乾隆七（1742）年	北京師範大学蔵 （北京）国家図書館蔵
i	字彙	文秀堂刻謙思堂刻本	清嘉慶元（1796）年	（北京）国家図書館蔵

明刊本鹿角山房刻本だけ刊行年が確定でないが、「明万曆中」（1573～1620 年）とする刊記が見える。原刊本の江東梅氏原刻本は 1615 年の刊行であることを考えれば、明刊本鹿角山房刻本はおそらく 1615 年から 1620 年の間の刊行である。実に原刊本刊行よりは間もない。また、周（2016〈22 ペ〉）では、明刊本鹿角山房刻本は、編纂者の

¹⁷ほかに、周（2016）は北京大学蔵を指摘したが、未見。

¹⁸周（2016）によれば、ほかに「明懷徳堂刻本」「崇文堂刻本」「鳳儀字彙」など刊行年次が記されていないものは少なくとも 11 種ある。

梅膺祚本人による重訂本であり、主として原刊本における欠字になるところを補っている」と指摘している。

(3) 日本における『字彙』の将来

『字彙』はいつ日本に伝わったかについては、現段階ではまだ知られていない。ただ、大庭(1970)では、紅葉山文庫の蔵書目録である「御文庫目録」¹⁹⁾において、寛永十九(1642)年の條に『字彙』の名が見えると述べている。これによれば、『字彙』は1642年以前に日本に将来された可能である。

ところが、前文に述べたように中国刊本は数種もあり、日本に伝わったのはどれだろうか。これについてはまだ明らかにされていない。ただ、周(2016)において、明刊本鹿角山房刻本を底本にした和刻本が三種あると指摘している(後 1.3 (1) で詳述)。これにより、少なくとも明刊本鹿角山房刻本が日本に伝わり、用いられていたに違いない。

1.3 江戸期における『字彙』の和刻本について

実際、『字彙』が将来された後、江戸初期から明治初期にかけてその和刻本が次々と作られるようになった。以下、その和刻本について概観したうえ、後文の比較で扱う三種の和刻本の基本情報について述べる。

(1) 各種の和刻本及びその底本

長澤(1981)、高橋(2008)、周(2016)によれば、『字彙』の和刻本について次の表2のように整理することができる。aからeのあわせて5種ある。これら5種については、表紙に記す名称として、aとcは『字彙』とあり、その他の三種は『字彙』でなく、それぞれ『四声韻字彙』『増注頭書字彙』『増注校正頭書字彙』とある。

¹⁹⁾ 大庭(1970)によると、「御文庫目録」は寛永十六(1639)年から貞享二(1685)年までの書籍を記録している。なお、今回「御文庫目録」を見るができなかった。

表2 和刻本の諸事情²⁰

	表紙に記す名称	版本/刊・印年次	所蔵/刊行所(者)	底本
a	字彙	慶安元年刻本(1648年)	京都風月宗知	未詳
b	四声韻字彙	寛文十一年刻本(1671年)	京都忠興堂	明刊本鹿角山房刻本
c	字彙	無年號八行本(1672年前) ²¹	未詳	明刊本鹿角山房刻本
d	増注頭書字彙	寛文十二年刻本(1672年)	京都風月勝左衛門・芳野屋五兵衛	明刊本鹿角山房刻本
e	増注校正頭書字彙	天明七年刻本(1787年)	京都風月荘左衛門・嶋本作十郎	寛文十二年刻本

長澤(1981)に「最初の刊本は慶安元年二月風月宗知版」とある指摘のように、aの慶安元年刻本(1648年)は最も古い。ただ、何を底本にしたかは未詳のままである。『字彙』の明刊本鹿角山房刻本が日本に伝わったということを考えると、おそらく明刊本鹿角山房刻本を底本したのだろうが、原本を見ることができなかつたため、断定できない。

周(2016)において、『字彙』の中国刊本の校勘を行い、各種の刊本の特徴及び日本における『字彙』の将来と刊行の状況について述べたうえ、日本で刊行された和刻本と鹿角山房蔵版とを比べた結果、「訓点本所据底本為『字彙』的重修本」「(四声韻字彙)所据底本亦為鹿角山房蔵版」「(増注頭書字彙)與上述訓点本、四声韻字彙相同」²²(35ペ)と判断した。周(2016)に言う「重修本」は明刊本鹿角山房刻本を指しており、また、「訓点本」は表2中に示すcの無年號八行本を指している。「四声韻字彙」と「増注頭書字彙」は表2に示す通り、それぞれbの寛文十一年刻本とdの寛文十二年刻本である。つまり、この三種の和刻本はいずれも明刊本鹿角山房刻本を底本にしたのである。

また、高橋(2008(95ペ))において、eの天明七年刻本は、寛文十二年刻本の笠原氏増注本の系統であり、寛文十二年刻本を底本にしたものであると指摘している。

²⁰ そのうち、a、d、eの三種にはそれぞれ重印本が出されている。長澤(1976)によれば、aの慶安元年刻本には、後に同じ出版社による慶安四年印本がある。高橋(2008)によれば、dの寛文十二年刻本には京都風月勝左衛門・芳野屋五兵衛による重印本があり、eの天明七年刻本には大阪柳原喜兵衛・京都風月左衛門による重印本と明治中大阪文栄堂前川善兵衛重印本がある。

²¹ 長澤(1981)において、刊本の刊行年について「最初の刊本は慶安元年二月風月宗知版で、次が是(寛文十一年刻本)、次が無年號八行本、後に頭書増注本が出版された」(386ペ)とある指摘により、無年號八行本は寛文十一年より後、また、寛文十二年より前に刊行されたのだと判断できる。

²² 日本語訳にすれば、「訓点本は『字彙』の重修本による」「四声韻字彙も鹿角山房蔵版を底本にした」「増注頭書字彙は前記の訓点本と四声韻字彙と同様」となる。

(2) 明刊本鹿角山房刻本を底本にした三種の和刻本の基本情報について

e の天明七年刻本は刊行年（1787 年）からして『異体字弁』（1692 年）よりはるか後に刊行されたものであり、『異体字弁』の成立には特に関わらないと考えられる。また、a の慶安元年刻本（1648 年）は底本が未詳のため、今回特に扱わないことにする。それで、『異体字弁』成立より前であり、かつ刊行年次が明確であるもの、すなわち明刊本鹿角山房刻本を底本にした三種の和刻本は、本稿の議論に扱うべきものであると考える。以下、長澤（1981）と周（2016）を参考しながら、これら三種の和刻本について紹介する。

・無年號八行本と寛文十一年刻本

この二種は、同じく、首巻・末巻・本文の十二巻を合わせて十四巻からなり、梅鼎祚の序があり、表紙見返しには「鐫宣城梅誕生先生重訂字彙 鹿角山房藏版」とあり、末巻「韻法直図」の末尾に「旌邑劉元初刻」が見える。無年號八行本においては、各巻の表紙には、「帝国図書館蔵」の朱印が見える。後に、国立国会図書館に収録され、一般に「国立国会図書館蔵本」と言う。字音読み・訓点・平仄を加えており、色濃く和刻本の特徴を見とれる。例えば、図 3 に見る通り、「侖」字の右傍には片仮名で字音読み「リン」と示し、双行書きの割注においては「龍春ノ切 音倫 思也 又 昆侖ハ天ノ形」のように訓点をつけてある。また、「侖」の右肩には四声を示す「○」（「白圈」と言う）をつけてあり、「平」であることを指す²³。

寛文十一年刻本においては、巻末に「寛文十一（辛亥）曆仲冬吉辰洛城忠興堂刻」との刊記がある。各巻の扉に「四声韻字彙」「新添増補」「改正訓点」「平○从圓、上△从鱗、去□从方、入㊦从月」が見える。「四声韻字彙」とは別名が『四声韻字彙』ということを指し、「新添増補」と「改正訓点」とは字音読み・訓点・四声を加えることを意味する。字音・訓点の施し方は無年號八行本とほぼ同様である。また、「平○从圓、上△从鱗、去□从方、入㊦从月」とは、無年號八行本には見えないもので、「○」「△」「□」「㊦」はそれぞれ「平」「上」「去」「入」

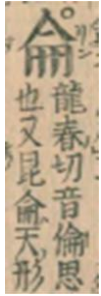


図 3



図 4

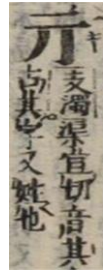


図 5

²³ 当該書の「目録」において「側白圈者平聲也。白黒相伴者兼平側者也。無圈者無慮側字也。無傍訓者讓前而不贅也」とあるように、「白圈」と「白黒」といった記号の意味を記している。

といった四声を指す。例えば、図 4 に見る通り、「倉」字の右傍には片仮名で字音「シ」とし、双行書きの割注においては「古文ノ施字」のように訓点をつけてある。また、「支」²⁴の右肩には四声を示す「○」（「白圈」と言う）をつけてあり、平声であることを指す。

・寛文十二年刻本

前の二種と異なり、首巻、本文の十二巻、末巻と附巻²⁵の 15 巻からなっている。巻末に「大阪高麗橋一丁目芳野屋五兵衛 華洛二条通衣棚角 風月勝左衛門」との刊記がある。書名については、題籤には「増注頭書字彙」と、序には「字彙増註補遺序」と、巻末には「首書字彙」とあるように、三か所に見える。「増注頭書字彙」と「字彙増註補遺序」とあるように、「増注」の部分を加えている。そのうち、前の二種とほぼ同様に字音読み・訓点・四声（平上去入）を加えたほか、新たに字義の説明を補い、また、元来の反切に韻目と清濁を加えている。図 5 に見る通り、「元」字の右傍には片仮名で字音「キ」とし、割注においては「志濁」のように清濁を示し、「志濁」の左下には四声を示す「○」（「小圈」と言う）をつけており、平声であることを指す。「渠宜ノ切音其 古ノ其也 又姓也」のように訓点をつけてある。また、字の右上には韻目を示す「▲」をつけてあり、三等字であることを指す。

以上、本節では、『異体字弁』・『字彙』の中国刊本・『字彙』の和刻本について、先行研究を参照しながらそれぞれ本稿の議論に関わる主要な情報について述べ、『異体字弁』の成立に関わる明刊本鹿角山房刻本およびそれを底本にした和刻本すなわち無年號八行本・寛文十一年刻本・寛文十二年刻本の三種であること、また、それぞれの成立事情について概観してきた。

2. 『異体字弁』の成立と『字彙』の関わりについての先行研究とその問題点

『異体字弁』の成立に関する先行研究は、管見の限り、杉本（1978b）²⁶と笹原（2018）しかない。

まず、「字彙直横図諺解、これは『異体字弁』の内容を考える上に、一つの示唆を与えてくれる。元圭の字学の一基礎は明、梅膺祚の『字彙』であることで、両者の関

²⁴ 「支」と「倉」が同音（「シ」）であるため、「支」をもって「倉」の字音を注している。

²⁵ 附巻は、「字彙増註補遺序」「字彙増註補遺総例」「引用書目」「四声凡例」「四等凡例」及び「音韻合攷」の六つの部分からなっている。

²⁶ 本節に引用した杉本（1978b）の指摘は、杉本（1998）において踏襲している。

係はただならぬといえそうである。」（杉本〈1978b〉166ペ）という指摘のように、杉本（1978b）は、中根元圭が『字彙』の付録にある「字彙直横二図」について『字彙直横図診解』²⁷という解説書を作成したということから、中根の字学の基礎の一つに『字彙』があり、『異体字弁』は『字彙』と深く関係していると判断した。

次に、杉本（1978b）は、『異体字弁』における漢字の分類について、「元圭は画引による漢字分類をほどこす上に、この『字彙』を参照したことは決定的となった。机上に『字彙』を置いて『異体字弁』編纂に使用したことはまちがいない。」（147ペ。冒頭引用の再掲）とあるように、『字彙』を参照したと指摘した。特に、『異体字弁』における「字画による配列分類」と「起筆による分類」の点において、杉本（1978b〈149ペ～150ペ〉）に見る次の指摘のように、『字彙』の用意、方式はそのまま元圭に受けつがれている」としている。

いうまでもなく字画による配列分類も『字彙』を参照したのである。ここで、『字彙』の「凡例」にあるつぎのことばをとりあげておきたい。一字変而為楷書。已失古体。而鐘王等以善楷名家者。又各逞筆竇。任意増減。沿習既久。字畫所繇參差。故數画須視前後一二位之間。

右²⁸は『異体字弁』の「導言」の一つの項と共通するものであろう。矣筆画多寡雖欲頗隨正間 隨俗者亦有矣 人有依俗書者有依正字者 所以不能以一様 故可視前後一二画之間。

『字彙』の〈凡例〉の前半のことばがないが、画引の際には文字により画数に多少の増減あることの注意である。『字彙』の用意、方式はそのまま元圭に受けつがれているのである。さらに本書の独創としてあげた起筆による分類——起直・起横・起斜——との関連について一考しておこう。『字彙』の「運筆」のところで、もし関連があるとすれば、なにか示唆されるところがあっただろう。

また、笹原（2018）では「総画数順に字を配列する点から明の梅膺祚の字書『字

²⁷ 『字彙直横図診解』について、杉本（1978b）において『字彙直横図診解』はこれはまた現存しないという。しかし、『元禄五年書籍目録』に記載があつて、四冊本となっている。しかも「中根元圭作」と注してある（166ペ）とある。

²⁸ 杉本つとむ（1978b）は縦書きであり、ここで言う「右」とは「一字変而為楷書。……故數画須視前後一二位之間」の部分を目指す。

彙』の影響がうかがわれ、同書の記述から着想を得たものか、同画数の場合には第 1 画の「運筆」によって「起横」「起直」「起斜」と字を分けて配列している。」(34 ペ)とあり、上記杉本(1978b)とほぼ同様な指摘をされている。

以上のように、『異体字弁』の成立は『字彙』を参照したことは間違いない。では、『異体字弁』の成立の際に参照されたのは中国刊本なのか、それともその和刻本なのかについて、以下 3 節において具体的に検討してみる。

3. 同じ字の同じ部品の書き方について

冒頭において述べたように、本稿では、同じ字の同じ部品の書き方の異同に注目して、『異体字弁』が参照したのはどれかについて検討する。そう考えたのは、『異体字弁』収録字(5002 字)のうちに明刊本鹿角山房刻本とそれを底本とした三種の和刻本に共通して見られる字(2690 字)について、字形上では両者の間には相違を見ない字(2578 字)がほとんどだが、明らかに相違が見られる字は 112 字も見つけたからである。

明刊本鹿角山房刻本と和刻本(三種)の間には相違を見ないというのは、例えば、次の表 3 に示す通り、『異体字弁』における「𠂔」「𠂕」「无」について、明刊本鹿角山房刻本と三種の和刻本においてすべての部品の書き方は全く同様に、少しも違わないという場合である。一方では、実際、先に述べた明刊本鹿角山房刻本と三種の和刻本の間には明らかに相違が見られる 112 字のうちに、「木」という部品を含む字(「床」や「様」など 73 字)が最も多く、「牛」という部品を含む字(「折」や「菘」など 7 字)がそれに次ぐ。そこで、以下、これら 80 字を対象に、縦画(「木」の二画目と「牛」の四画目)の書き方、つまり「|」のようにはねて書かれるか、それとも「|」のように書かれるかに注目して論を進める。なお、その他の 32 字²⁹については、また別稿において検討する。

²⁹ これら 32 字について、「言」「尸」「又」「广」などおよそ 13 の部品を含む字で、いずれも 3 字以下であり、ごく少数である。





表3 部件の書き方は一致している例










	異体字弁	明刊本 鹿角山房刻本	和刻本		
			無年號八行本	寛文十一年刻本	寛文十二年刻本
出	出 之繁				
无	无 無古				
芭	芭 葩同				

3.1 同じく「木」という部件を含む字（73字）の縦画の書き方の場合











「木」という部件を含む73字について末尾の付表にまとめて一覧している。以下、「木」の縦画の書き方について、『異体字弁』・『字彙』の明刊本鹿角山房刻本・三種の和刻本において、それぞれどのようになっているかを確認する。

『異体字弁』では、「木」の縦画の書き方についてみると、はねて「丨」のように書かれるのは60字あり、「|」のように書かれるのは13字ある（詳細は付表を参照）。

まず、はねて「丨」のように書かれる60字についてみる。例えば、『異体字弁』において「」「」とあり、明刊本鹿角山房刻本では、「」「」のようにすべて

「|」のように見えており、はねて「丨」のように書かれるものは1例もない。三種の和刻本についてみると、無年號八行本では、影印版のために判別しにくい「」という1字以外は、「」「」のようにすべてはねて「丨」のように書かれる。寛文十一年刻本では、「」「」のようにはねて「丨」のように書かれるのは58字ある一方で、「|」と書かれるのはわずか「」と「」2字のみである。寛文十二年刻本では、「」「」のようにすべてはねて「丨」のように書かれる。

次に、「|」のように書かれる13字についてみる。例えば、『異体字弁』において

「」「」とあり、明刊本鹿角山房刻本では、「」「」のようにすべて「|」のように書かれる。三種の和刻本についてみると、無年號八行本では、すべてはねて「丨」と見え、「|」と書かれるものは1例もない。寛文十一年刻本では、同じように「」「」すべてはねて「丨」と見え、「|」と書かれるものは1例もない。寛文十二年刻本では、「|」と書かれるのはわずか「」と「」の2字のみであり、その他11字は「」「」のようにすべてはねて「丨」と書かれる。

以上を次の表4にまとめることができる。

表4 「木」という部件の縦画の書き方

異体字弁	和刻本		明刊本鹿角山房刻本
」 60字	無年號八行本 』 60字		」 60字
	寛文十一年刻本	』 58字	
		」 2字	
	寛文十二年刻本 』 60字		
」 13字	無年號八行本 』 13字		」 13字
	寛文十一年刻本 』 13字		
	寛文十二年刻本	』 11字	
		」 2字	
計 (73字)	」 69字 / 」 4字	」 0字 / 」 73字	

表4にまとめた通り、「木」の縦画の書き方において、『異体字弁』において「」のようにはねて書かれる60字について、和刻本においては、同様にはねて書かれる場合（無年號八行本と寛文十二年刻本）と、はねて「」のように書かれるもの（58字）と「」のように書かれるもの（2字）の両方を含む場合（寛文十一年刻本）となっている。これに対して、明刊本鹿角山房刻本においては、一貫して「」のように見え、「」のようにはねて書かれる場合はない。また、『異体字弁』では「」のように書かれる13字について、明刊本鹿角山房刻本ではすべて同様に「」のように見え、「」のようにはねて書かれる場合はない。これに対して、和刻本においては、これと違ってすべて「」のように書かれる（無年號八行本と寛文十一年刻本）場合と、「」のように書かれるもの（11字）と「」のように書かれるもの（2字）の両方を含む場合（寛文十二年刻本）となっている。

以上のように、和刻本の三種においてはそれぞれ事情が一樣ではないが、73字を通してみれば、『異体字弁』では「」と書かれる場合（60字）は「」と書かれる場合（13字）より多いのと同様に、和刻本では「」と書かれる場合（69字）は「」と書かれる場合（4字）より多く、『異体字弁』においても和刻本においても「」と書かれる傾向が顕著である。これに対して、明刊本鹿角山房刻本においては、73字はすべて「」と見えており、「」と書かれる場合は一つもない。つまり、和刻本は『異体字弁』と一致し、「」と書かれる傾向を示しており、明刊本鹿角山房刻本は「」と書かれる傾向を示し、『異体字弁』と異なっている。

3.2 同じく「牛」という部件を含む字（7字）の縦画の書き方の場合

以下、「牛」という部件を含む7字についてみる。そのうちの「牛」の縦画の書き方について、3.1と同様に、『異体字弁』・『字彙』の明刊本鹿角山房刻本・三種の和刻本において、それぞれどのようなになっているかを確認する。

『異体字弁』においては、「牛」の縦画ははねて「𠂔」のように書かれる字について、三種の和刻本のいずれにおいても同様にはねて「𠂔」と書かれる一方で、明刊本鹿角山房刻本では「𠂔」のように書かれるというような場合は、5字ある。次の表5の通りにまとめられる。

表5 「牛」という部件を含む字

	異体字弁	明刊本 鹿角山房刻本	和刻本		
			無年號八行本	寛文十一年刻本	寛文十二年刻本
折	折 𠂔同	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔	𠂔 𠂔同	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔	𠂔 𠂔同	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔	𠂔 𠂔同	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔	𠂔 𠂔同	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔

上の表に示すように、例えば、『異体字弁』において^折𠂔とあり、「折」の「牛」の縦画ははねて「𠂔」のように書かれる。和刻本においては、無年號八行本・寛文十一年刻本・寛文十二年刻本の順でそれぞれ「𠂔」「𠂔」「𠂔」とあり、いずれも、はねて「𠂔」と書かれる。一方で、明刊本鹿角山房刻本では「𠂔」とあり、「𠂔」のように書かれる。

以上5字のほか、『異体字弁』において「牛」の縦画は「𠂔」のように書かれる次の2字については、明刊本鹿角山房刻本においても三種の和刻本のいずれにおいても同様に「𠂔」のように書かれる。

『異体字弁』において^犇𠂔とあり、「犇」の「牛」の縦画は「𠂔」のように書かれる。明刊本鹿角山房刻本と三種の和刻本（無年號八行本・寛文十一年刻本・寛文十二年刻

本の順で)において、それぞれ「𠂔」「𠂕」「𠂖」「𠂗」とあり、いずれも「丨」と書かれる。また、『異体字弁』において「𠂘」とあり、「𠂘」の「牛」の縦画は「丨」のように書かれる。明刊本鹿角山房刻本と三種の和刻本（無年號八行本・寛文十一年刻本・寛文十二年刻本の順で）において、それぞれ「𠂙」「𠂚」「𠂛」「𠂜」とあり、いずれも「丨」と書かれる。

以上を次の表6にまとめることができる。

表6 「牛」という部件の縦画の書き方

異体字弁	三種の和刻本	明刊本鹿角山房刻本
丨 5字	丨 5字	丨 5字
丨 2字	丨 2字	丨 2字

上の表にまとめた通り、「牛」という部件の縦画について、『異体字弁』ではやはり二通りの書き方をしており、はねて「丨」のように書かれるのは7字中5字、その他の2字は「丨」のように書かれる。三種の和刻本のいずれにおいても、これと全く同様である。一方、明刊本鹿角山房刻本においては、すべて「丨」のように書かれる。

つまり、『異体字弁』では「丨」（5字）と「丨」（2字）の二通りの書き方をしており、「丨」と書かれるという傾向であるのと異なって、明刊本鹿角山房刻本においては一貫して「丨」のように書かれる。これに対して、三種の和刻本のいずれにおいても『異体字弁』の場合に同様な書き方をしており、「丨」と書かれる傾向である。これは前文においてみた「木」という部件の縦画の書き方に同様な傾向である。

本節では、明刊本鹿角山房刻本と和刻本の両資料の間に明らかに相違が見られる112字のうち、最も多くみられる「木」という部件を含む字（73字）と、その次に多く用いられる「牛」という部件を含む字（7字）のあわせて80字を対象に、その縦画の書き方に注目して、『異体字弁』における書き方を確認したうえ、明刊本鹿角山房刻本と和刻本とを見比べ、書き方の上の異同について調べてきた。以上調べてきたことをまとめると、次の表7になる。

表7 「牛」という部件と「木」という部件の縦画の書き方

	異体字弁	三種の和刻本	明刊本鹿角山房刻本
「牛」という部件を含む字 (73字)	┆ 60字 / 13字	┆ 69字 / 4字	┆ 0字 / 73字
「木」という部件を含む字 (7字)	┆ 5字 / 2字	┆ 5字 / 2字	┆ 0字 / 7字
計 (80字)	┆ 65字 / 15字	┆ 74字 / 6字	┆ 0字 / 80字

つまり、「木」という部件を含む 73 字を通してみれば、『異体字弁』では「┆」とはねて書かれる (73 字中 60 字) という傾向を示し、和刻本における場合 (73 字中 69 字) と一致しており、明刊本鹿角山房刻本はこれと異なり、「|」と書かれる (全 73 字) という傾向を示している。「木」という部件の場合とほぼ同じく、「牛」という部件を含む 7 字を通してみれば、『異体字弁』では和刻本における場合と全く同様に、「┆」とはねて書かれる (7 字中 5 字) という傾向を示しており、明刊本鹿角山房刻本はこれと異なり、「|」と書かれる (全 7 字) という傾向を示している。「木」と「牛」の両方をまとめてみると、『異体字弁』では「┆」とはねて書かれる (80 字中 65 字) という傾向を示し、和刻本における場合 (80 字中 74 字) と一致しており、明刊本鹿角山房刻本はこれと異なり、「|」と書かれる (全 80 字) という傾向を示している。明らかに、『異体字弁』は和刻本に一致する傾向である。

おわりに

江戸時代における異体字の在り様ないし当時における字書の中日交流を課題にする際の好資料の一つとして、『異体字弁』を見逃さない。しかしながら、『異体字弁』は『字彙』の中国刊本と和刻本のどちらを参考にして作られたかについて、これまで問題視されていない。

本稿では、『異体字弁』成立より以前に将来された『字彙』の明刊本鹿角山房刻本とそれを底本とした三種の和刻本を研究資料として、『異体字弁』における明刊本鹿角山房刻本と和刻本のいずれにも共通して収録している 2690 字を対象とし、同じ字の同じ部件の書き方の異同に注目した。その際に、具体的に、明刊本鹿角山房刻本と和刻本の間に明らかに相違が見られる 112 字のうち、最も多く用いられる「木」という部件を含む字 (「床」や「様」など 73 字) とその次に多く用いられる「牛」という部件を含む字 (「折」や「菽」など 7 字) を対象にして、縦画つまり「木」の二画目

と「牛」の四画目の書き方において如何なる異同があるかについて検討してみた。そこで、次のようなことがわかった。①「木」という部件を含む73字を通してみれば、『異体字弁』では「」とはねて書かれる(73字中60字)という傾向を示し、和刻本における場合(73字中69字)と一致しており、明刊本鹿角山房刻本はこれと異なり、すべて「|」と書かれる。②「木」という部件の場合とほぼ同じく、「牛」という部件を含む7字を通してみれば、『異体字弁』では和刻本における場合と全く同様に、「」とはねて書かれる(7字中5字)という傾向を示しており、明刊本鹿角山房刻本はこれと異なり、すべて「|」と書かれる。③「木」と「牛」の両方をまとめてみると、「」と書かれる場合と「|」と書かれる場合における字例を見ると、『異体字弁』ではそれぞれ65字と15字で、和刻本ではそれぞれ74字と6字で、明刊本鹿角山房刻本ではそれぞれ0字と80字となっている。

明らかに、『異体字弁』においては、和刻本と同様に「」と書かれる傾向を示しており、明刊本鹿角山房刻本において「|」と書かれるという傾向とは異なっている。したがって、この二つの部件の縦画の書き方を見る限り、现阶段では、『異体字弁』は明刊本鹿角山房刻本より和刻本を参照して成立した可能性が大きいのではないかと考える。

本稿では、『異体字弁』の成立について検討する際の一つの手がかりを示したと考える。また一方、『異体字弁』が参照したのは中国の刊本かそれとも和刻本なのかを検討すること自体は、江戸時代における中日字書の交流ないし字書史における中日字書の交流に対して意味のある議論であると考えられる。

実は、『異体字弁』の成立について、笹原(2018〈34頁〉)において明代の『古俗字略』³⁰や清代の『字彙補』(冒頭を参照)の両字書からの影響もうかがえる³¹と指摘しており、これらの字書からどのような影響を受けたかについて稿を改めて考えたい。また一方で、そもそも、『字彙』の和刻本が数種も作られたこと、そして、それとほぼ同時期に『和字彙』(寛文十一〈1671〉年)や『小字彙』(元禄五〈1692〉年)といった和製の『字彙』が作られたこと³²は、日本における『字彙』の伝播と受容を物語

³⁰ 陳士元(1516~1597年)編纂、十六世紀後半刊。約25000字を収録。

³¹ 筆者の調査では、『異体字弁』収録字5002字について、清代の字書『正字通』(冒頭において言及した)において63字ほど確認できた。一回きりの調査で、今後再度精査してみるが、この字書は『異体字弁』成立の前に日本に将来されたものであり、その影響があったか否かについても検討する必要があると思う。

³² 杉本(1978b)において「寛文十一年には『和字彙』(大和田氣求編)、元禄五年には『小字彙』などの垂流まで出版されてい

る。そうした背景のもとで、『異体字弁』を通して江戸時代における異体字の在り様ないし字書の中日交流について研究すべきであると痛感する。以上を含めて、今後の課題としたい。

参考・引用した文献

- 大矢真一（1971）「多芸なる教養人中根元圭」『日本史発掘 9 日本及日本人』（03）、東京 J&J コーポレーション
- 大庭脩（1970）「東北大学狩野文庫架蔵の〔旧幕府〕御文庫目録」『関西大学東西学術研究所紀要』（03）、関西大学東西学術研究所
- 佐藤喜代治編（1987）『漢字講座 7 近世の漢字とことば』明治書院
- 佐藤喜代治編（1989）『漢字講座 2 漢字研究の歩み』明治書院
- 笹原宏之（2014）『漢字の歴史』ちくま新書
- 笹原宏之（2018）「異体字弁」（笹原宏之執筆）日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版
- 杉本つとむ編（1978a）「解説」『異体字研究資料集成 第一期第二巻 異体字弁』雄山閣
- 杉本つとむ（1978b）「異体字研究資料の考察」『杉本つとむ日本語講座 1 異体字とは何か』桜風社
- 杉本つとむ編（1998）『辞書・事典の研究1』八坂書房
- 高橋良政（2008）「字書の活用一字彙を中心として」『桜文論叢』（1）
- 長澤規矩也（1976）『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』汲古書院
- 長沢規矩也編（1981）「解説」『和刻本辞書字典集成第四巻』汲古書院
- 蔣娟（2013）『「異体字弁」所収「古字」研究』浙江大学碩士論文
- 周艶紅（2016）『「字彙」文字整理與研究』北京師範大学博士論文
- 沈涵（2020）『「異体字弁」及其價值研究』王曉平主編『國際中国文学研究叢刊（第八集）』上海古籍出版社
- 沈涵（2021 刊行予定）「明代字書『字彙』対日本近世異体字的影響——以日本近世字書『異体字弁』為例」『東北亜外語研究』、大連外国語大学出版社

る。」（146 ぺ）と指摘している。杉本（1998）において杉本（1978b）を踏襲している。

